

お寺の社会性



－ 生臭坊主のつぶやき －

竹中尚文

はじめに

最近、大手スーパーが葬儀業に参入するに際して、お葬式のお布施の額を明示しようと言う話があった。お葬式のお布施は、何故あんなに高いのだという声を受けてのものだと思う。お葬式についての時給換算をすればお布施はべらぼうな値段だという声があつてのことだと思う。この動きにお寺は、戦々恐々とするばかりであった。

そもそも、お布施が坊さんの収入という考えに対して何も反論できない坊さんというのはどうだろう。坊さん自身がお布施を自分の個人的収入と考えているのだろう。たとえば、病院の手術費を時給換算して不満を述べる人はいないだろう。それは、手術費が執刀医の収入とは誰も考えないからだだろう。ところが坊さんはお葬式のお布施をそのままポケットに入れて、坊さんの個人的収入とすることが多いようだ。こうした状況でお葬式のお布施は高いと言う声となっていると思われる。

一方で、お布施に基準額を求めるのは払う側の都合でもある。時々、いったいどれだけの額のお布施を払えばよいのか尋ねる人がいる。そんな時、私は尋ねる人が経

済的に余裕のある人だろうと思う。経済的な余裕のない人は、いくらだと言われても払えないものは払えないのである。

今、お葬式の坊さんは必要ないという動きもある。お葬式に坊さんを頼みたくない気持ちも分からなくはない。それは坊さんが、お葬式の中で本当に必要な存在になり得ているかを問われているのである。さらに言えば、お寺や坊さんは社会的に必要な存在であるのかと言うことが問われている。私たち僧侶は、現代社会に於いてその存在意義が問われているように思う。一方で、何百年も続けてきた坊さんやお寺が、無くなるはずがないと言う人たちもいる。

私は社会の中で存在意義を無くした坊さんやお寺は消えゆく存在であると思っている。今、坊さんが自分たちの暮らす社会の中で、自分の存在意義を語れずにお布施のみを求めれば、社会的には消えてゆく存在であろう。

1. ある尼僧

今回、私は社会的存在としての僧侶やお寺というようなテーマを語るのにアメリカ人の僧侶の話をしたい。

私が、ジェニファー・リー(仮名)に出会

ったのは、アメリカ合衆国のバークレーにある仏教大学院の寮であった。北米大陸での仏教伝道に興味を持っていた私が暫く滞在させてもらった寮で、彼女は修士論文を書いていた。修士課程を修了すれば、日本に留学して得度をして僧侶になるという。

浄土真宗本願寺派がアメリカ開教を始めてから 100 年を超える。現代は、開教と言っても日本から開教使が渡ると言うのは少数派になっていて、アメリカ生まれの人が僧侶となっていくのが主流になっている。教団が北米に仏教大学院の修士課程を設立していて、そこで仏教や真宗についての教育を行う。加えて、日本語教育もする。修士課程修了後は日本に留学して、さらに僧侶としての仏教知識を学び、經典の読誦やいろいろな仏事作法を習うのである。そうして、得度式を経て僧侶になっていくのである。

少し余談になるが、このシステムで僧侶を養成することに、教団の経済的負担は小さくない。また本人としても個人的に時間と費用のコストは小さくない。アメリカで浄土真宗の僧侶になるには、修士のキャリアと二カ国語の習得は不可欠なのである。この状況で、僧職という人生の選択をする人は少ない。人生の投資とそのリターンを考えると、もう少し実利的な人生の選択をする人が多い。ここでも人材難である。

2. 高校を卒業して

話を戻そう。それから程なくして、彼女は日本に留学してきた。受け入れは、宗門系の龍大であった。半年か一年と言う比較的短い留学であった。それは、彼女の経

済状況が奨学金頼みのゆとりのない状態であったこともあるし、日本で仏教の研究を深めることより、早く得度をして僧侶になりたいと言うこともあった。

短い留学の間に、彼女を私たちの寺に招待した。普通の田舎寺で僧侶として現場を体験してもらいたいと言う目的であった。田舎の空気を吸いながら、ジェニファーがオクラホマ出身であること初めて言った。田舎の景色に懐かしさを感じたらしい。

彼女は、オクラホマ州の田舎で高校を卒業した。自分の家庭には、彼女が大学進学をするような経済的余裕なんてなかったし、かといって田舎町で就職先もなかった。だから高校を卒業すると直ぐに、彼女は海兵隊に入隊した。

海兵隊では沖縄を中心に 6 年を過ごした。この 6 年は相当にきつかったらしく、「これを越したのだから」と言う彼女の生きる自信になった。この期間に貯めたお金で彼女は大学に入学した。卒業後、仏教大学院の修士課程に入った。その頃、例の 9.11 テロがあって、アフガン戦争とイラク戦争と続いた。報道に登場するアメリカの兵士は、ほとんどがジェニファーのようにアメリカの聞いたことの無いような田舎町の出身者であった。彼女もこの時に海兵隊に在籍していれば、イラクで戦っていたかもしれないし、アブグレイブに居たかもしれない。そうならば、彼女は除隊して大学進学という人生の選択をできただろうか。どんな時に何処にいたと言うちょっとしたタイミングの違いで、人生は大きく異なることがある。

3. なぜ従軍僧なの

彼女は僧侶となって、再びアメリカ軍に戻るのが希望だという。いわゆる従軍僧になりたいと言う。ここで、私は Chaplain という言葉を従軍僧とした。このチャプレンという言葉は、従軍僧の他に教誡師、あるいは病院とかで心のケアに携わる宗教者をさす言葉でもある。キリスト教文化を背景に持つ言葉である。キリスト教の現世に対しての関わり方を反映する言葉である。日本では教誡師は仏教僧が多かったので、それは仏教的背景を持つ仕事である。私は、学生時代に仏教を学んだ。その時に教誡師になるための講座が開かれていたが、私は教誡師という言葉すら知らず、その講義を受けることはなかったことを悔やんでいる。

従軍僧については、日本の自衛隊にはこのような職種はない。だから、ジェニファーが従軍僧になりたいと言った時、私は従軍僧というものを理解していなかった。第二次世界大戦以前の日本軍には従軍僧は存在した。私が聞いた当時の様子では、兵士が死亡すると戦場でお葬式をする。その主な役割が従軍僧であったようだ。

ジェニファーはアメリカ軍史上初めての、仏教従軍僧である。彼女は、アジア系アメリカ人として仏教の話ができる従軍僧になりたいのだそうだ。彼女の話によれば、今のアメリカ軍はアジア系の人たちが増えているという。そんな人の助けになる仕事がしたいのだそうだ。

彼女は得度を済ませて僧侶となってアメリカに帰った。浄土真宗の北米教団とアメリカ軍は彼女の従軍僧になりたいと言う希望を聞き入れた。北米教団の上部組織である本願寺の議会でそのことが取り上

げられた。ある議員が、戦前の教団が戦争協力をしてきた歴史を振り返って、今また教団が従軍僧を養成し軍に送り込むことに、過去の反省が見られないと言う指摘があった。大切な意見である。平和を説く仏教の教団がかつての大戦で戦争遂行に協力したのだから、しっかりと反省をしなくてはならない。

今、彼女は従軍僧として海軍にいるそうだ。航海の中で、自らの命を絶つ兵士もいる。戦場に赴くのと、他者の命を奪うのである。人間の命を絶つことは、簡単に整理のつく話ではない。命を感じることの重み。彼女はその場に身を置いている。

戦争協力だと受け取る人もいるだろうが、そこに身を置いて僧侶の仕事をするのは、大切な事だと思う。仏教用語で人間世界を娑婆と言う。迷いの世界である。善悪の判断も出来ないところである。私も善悪、是非のはっきりしないところに身を置く僧侶でありたい。

時として、世界大戦中の日本のように戦争反対を唱えることも困難な状況がある。その中で、戦争反対を唱えることは尊いことである。山に籠もったり、寺の中で厳しい修行をする僧侶もいる。立派だと思う。私が得度をして僧侶になったとき、坊さんになるのに厳しい修行をしたいへんですねえ、と声を掛けられたものだ。頭をかきながら私は生臭坊主ですから、と答えたものだった。閉ざされた清浄な環境の中で僧侶としているより、娑婆世界と言う人間の世界に生きる僧侶でいたいと思った。

私は生臭坊主なのである。